

草地酪農研究農場だより

8月も半をすぎて暑さも峠を越した。朝は牧草地の露がしっとりと重い。研究農場の仕事も秋の体制に入る。

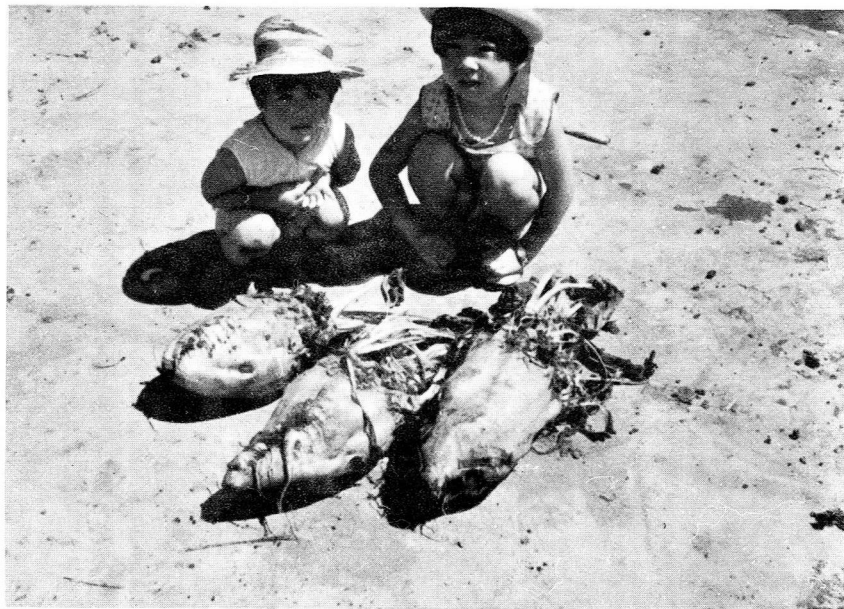
デントコーンのエンシレージ切込み、下総かぶの播種に続いて、秋の牧草播種期となる。今年は春から乾燥気味ではあったが、気温と日照に恵まれて、デントコーンの生長は見事だ。例年ハーベスターで刈取り、切込みを一貫作業でやるが、刈取り時期と水分調整がエンシレージの良否を左右するので、黄熟期以後の刈取りを計画している。トレンチサイロ、バンカーサイロ及び半地下塔型サイロと合計約200トンを詰めるが、夫々踏圧、空気ぬき、密封に意をそそいで、この見事な太陽のエネルギーのかたまりをそっくり貯蔵したいものだ。

ソルゴー、スーダングラス、テオシントなど盛夏の青刈作物が空をつきぬくように見事に伸びている。青刈ひまわりの原種圃は巨大な花輪の群舞のようだ。パヘヤグラス、ダリスグラス、ローズグラスなど耐暑性の牧草も時を得たりと繁茂している。混播牧草は春からの連続刈取りで一服して

いるが、草丈30cm位で休ませてあるから9月中旬から再び生長を再開するだろう。

今夏の傑作は家畜ビートだ。堆肥の増施、適期の間引と害虫防除が効果あって素晴らしい出来栄となった。大きいのは茎葉共で1ヶ7.5kgもある。写真はその一つで子供と大きさを比較して下さい。畦幅75cm、株間30cmだから反当4,000本位はあるから、全部7.5kgあったとすれば、反収40トンは可能と云うことになるが、実際には反当15トンだったから平均1株4kgほどだが、播種から収穫まで約120日と見れば1日当たり反当125kgの生産で、1日成牛1頭に茎葉共約20kg給与すれば、1反歩で50頭に1カ月半給与出来る勘定となる。7月中旬から8月下旬にかけて、牧草夏枯れ時の乳牛への御馳走として全く価値ある作物だ。この夏の根菜に対して冬の根菜は下総かぶだ。ビートやデントコーン又はイタリアンライグラスの跡作として、堆肥をゴッソリ施して8月末に播く。これが下総かぶ多収のコツだ。研究農場もこの定石を守つてもりで準備をすすめている。

草地酪農研究農場長 中野 富雄



写真説明 (7月25日うつす、千葉草地酪農研究農場)

家畜ビート (品種 ハーフシュガーエロー)

播種期 3月29日 畦幅75cm 株間30cm

10畝当播種量 1.5kg

10畝当施肥量 堆肥 4,000kg、石灰 300kg、硫安25kg、過石60kg、加里20kg